

科学をもっと知ろう！

かがくナビ

古仙台湖時代

今から1000～500万年前、それまで海底だった東北地方は奥羽山脈付近を中心に隆起して陸地になり、火山活動も活発になりました。この火山活動にともなう陥没ができ、そこに水がたまることによ

ってできた湖が仙台西方の広い地域ありました。南は秋保、北は七北田まで、白沢を中心として広がっていました。この湖に堆積した地層が白沢層です。この白沢層は、おもに葉理



のある凝灰質シルト岩と軽石質凝灰岩からなる湖成層です。

この地層は、植物化石を含んでいます。クルミ属・ハンノキ属・カバノキ属・ブナ属・ケヤキ属・カエデ属などの冷温帯性落葉広葉樹の化石を主としますが、シロモジ属・クス属・モチノキ属などの暖帯種やユリノキ属・アオギリ属などの残存種をまじえます。湖のまわりの山腹地は冷温帯性落葉広葉樹を主体とした森林におおわれ、温帯な気候に支配されていたと考えられます。

仙台市内では、泉区の根白石付近や中身山林道、さいかち沼周辺でこの時代の化石を採集することができます。